

とらうべ

羞恥心のとりあつかい

中沢 けい

作家

もう、ずいぶん前のことになるけれども、作家の
もろさわようこさんと産婦人科で受診するのは
恥ずかしいか、恥ずかしくないかというようなこ
とを話し合ったことがある。恥ずかしいという感
受性はきわめて身体的な感覚を伴ったものだ。恥
ずかしいと顔が赫くなるとか、恥ずかしいと汗を
かくとか、そういった身体の感覚抜きには恥ずか
しいという感情はありえない。

もろさわようこさんは、産婦人科で受診するの
は恥ずかしいと率直におっしゃっていた。私ほど
の年齢になると、顔を赫くすとか汗をかくとい
った恥ずかしさの身体的な現象を見せてしまうこ
ともまた恥ずかしいというような二
重の感覚を持っている。恥ずかしい
と覚えることじたいが恥ずかしいと
いうやつだ。もろさわようこさんと
私は、祖母と孫くらいの年齢差があ
った。自分の親や祖母の世代の女性
が何事につけても恥ずかしがるよう
な様子を見せるのに、やや歯がゆさを覚えていた
のは確かだ。そう恥ずかしい、恥ずかしいと言っ
ていては、健康も得られなければ未来も開けない
ような気がした。身体が反応としてあらわす恥
ずかしさを、頭で殺してしまうような感じで、上の
世代が持っていた身体感覚を押し殺したのは、私
ぐらの年齢を境にしているのではないかと思う。

ただ、こうして時代が変わってきてみると、何
事かを恥ずかしいと感じる感覚を、あまりに
も押し殺しすぎたのではないかと、少し
反省したくなるようなこともある。

それに気付いたのは、言葉の問題

からだった。うれしいとか哀しいという言葉があ
る。これらの感情をあらわす言葉は、不思議なも
ので「哀しい」と言われても、ちっとも哀しくなさ
そうに見える時がある。「うれしい」と口先で言っ
ていても、ほんとうは喜んでいないんだと解る
時がある。身体全体が喜びや哀しみを表現してい
ないと、その言葉はほんとうにむなしく響く。と
ころが、心にもないことを口先だけで言っている
のではなく、「哀しい」とか「うれしい」という感覚
それじたいが薄いのではないかと疑りたくなるよ
うな場面に出会うことが、しばしば、おこるよ
うになった。



輝くような笑顔とか深い哀しみに
しずんだ表情というように、多くは
顔の表情がそれらの感覚をあらわす
ものだ。表情は身体の感覚に支えら
れている。そもそも、感覚というも
のは、身体を抜きにはありえない
ものであろう。こうした身体から

あふれてくる感情が乏しいのは、現代人があまり
にも頭でものを考えすぎるからだと言われ
る。

現代人が頭でものを考え過ぎる傾向を持つよ
うになったうらには、羞恥心のあつかいが乱暴すぎ
たという事情も絡んでいるようだ。恥ずかしいこ
とを恥ずかしいと感じる感性を大切にとりあつか
う方法というのはまだまだ工夫の余地があること
だ。羞恥心を大切にとりあつかうことが、豊
かな感情生活を作り出すための一歩にな
ると、今さらながらにもろさわさん
との会話を思い出す。